差別されるマイノリテ

—エチオピア南西部カファ地方に生活するカファとマンジョの事例から—

吉　田　早悠里

はじめに

本研究は、エチオピア南部諸民族州カファ地方（Southern Nations, Nationalities, Peoples' Regional States, Kafa zone）でマジョリティのカファ（Kafa）と、カファから差別されるマンジョ（Manjo）の関係をもとに、差別がどのような状況の中で問題として浮かび上がっているのかについて考察するものである。

カファ地方の人口は約86万人（2007年）と推定され、そのうちの大部分がアジア・アフロ語族オモ系のカファ語を話す農耕民カファの人々である（Fleming, 1976）。マンジョはカファと同様にカファ語を話すが、カファ地方およびその近隣の行政地域に分散して居住し、同地区に暮らす他の民族集団と入り混じりながら生活している。カファ地方に生活するマンジョは、カファ地方の全人口の約1.1～1.4%を占めるとされ、カファ地方の10行政地区全てに分散し、カファと共住している。今日、カファとマンジョはほぼ同等の生活を営んでいるが、カファはマンジョを差別している。

本研究では、カファ地方に暮らすカファとマンジョが、カファ王国時代（-1897）、エチオピア帝国編入後の帝政期（1897-1936）、イタリア統治期（1936-1941）、ハイレ＝セラシエ帝政期（1941-1974）、デルグ政権期（1974-1991）、現政権（1991-）の５つの政権を経て、現在、どのような関係にあるのかについて明らかにするものである。カファによるマンジョ

図１　エチオピアにおけるカファ地方

への差別がどのようになされ、また、マンジョがカファによる差別をどのように受け止めているのかについて、現地調査に基づいて考察する[1)]。

1．カファとマンジョ

カファ地方は、19世紀に盛んになったアラビア半島との紅海交易において貴重な商品とされたコーヒー、麝香、象牙などの産地、奴隷の供給地としてカファ王国が繁栄してきた。コーヒーの産地としても名高いカファ王国には19世紀から20世紀にかけて、ヨーロッパの旅行家、探検家、宣教師らが訪れ、多くの滞在記録を残している（Grühl, 1932:170-177）。カファ社会に関する研究は、1900年代初頭にオーストリア人のBieber（1920）によって民族学的研究がなされ、1960年代にはOrent（1969；1970）によって親族構造と在来宗教についての社会人類学的研究がなされた。1970年代に入ると、Lange（1982）によって歴史的視点に基づいてカファ王国に関する文献の比較研究や現地調査が行われ、カファ王国の歴史が明らかにされた。

これらのカファ研究では、カファ王国は階層的社会秩序を備えた社会としてとらえられ、上から王を輩出する農耕民カファ、次に鍛冶屋（*Qemmo*）、吟遊詩人（*Shatto*）、織工（*Shammano*）、皮なめし（*Manno*）などの職能集団、そして狩猟集団とされるマンジョ、奴隷の順に階層づけられていたとされてきた。その下で、職能集団及びマンジョはカファから差別を受けてきたという。カファによる差別の意識は日常の様々な営みや場面の中で表現されたが、特に食事や結婚、埋葬などにおいて顕著であった。とりわけ、マンジョは奴隷と同様に、カファから「悪い人々（*gondo ashi yaro*）」「人間以下（sub-human）」とみなされてきた。

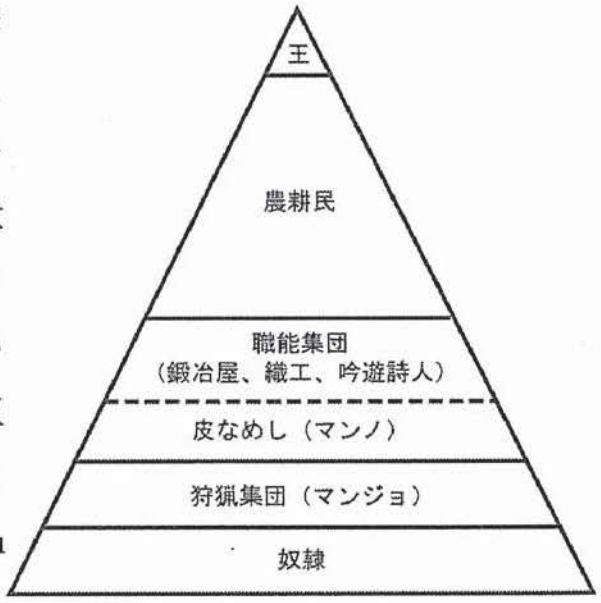

図2　カファ王国の階層的社会秩序

マンジョは階層的社会秩序のもとでカファ

よりも下位とみなされ、忌避・差別の対象とされる一方で、狩猟によって食用の野生動物を獲得するほかに、カファ王国の経済的繁栄を下支えした象牙、麝香などを供給してきた。野生動物に関する知識や狩猟の能力をもったマンジョは、カファ王国の王侯貴族が勢子や門番として用いたという指摘もなされてきた（Gezahegn 2003:93; Huntingford 1955:136）。他にも、マンジョはカファ王国の時代には国境警備兵や処刑執行者、あるいは戦争捕虜の宮刑[2]を行う者として王に仕え、王家の墓の警備も担っていたという（Lange, 1982:266-267）。さらには、マンジョは、カファ地方の先住民であるとされ、カファ王国の最初の王[3]であるともされてきた（Beckingham & Huntingford, 1954:lvii ; Orent, 1970:226 ; Fleming, 1976:356）。だが、カファ社会の研究の一部として言及されることが多かったマンジョは、マンジョ自身に焦点をあてられることが少なく、マンジョの持つ歴史的背景、その生業や暮らしぶり、社会関係については断片的な記述にとどめられてきたといえる。

2．変化するマンジョの生活

これまでの研究では、マンジョは土地を持たず、移動的生活を送りながら食料獲得のための狩猟採集を行う狩猟集団とされてきた（Gezahegn, 2003:90）。デルグ政権期以前の状況を知るマンジョの一人は、今日ほど人口も多くなく、森林も多く残されていた当時について、野生動物が豊富で頻繁に狩猟が行われていたので「毎日、肉ばかり食べていた」と語っている[4]。当時、マンジョの男たちは朝まだ薄暗い時間帯から農作業を行い、日が高く昇り始める時間帯には森へと狩猟に出かけ、日が沈むころ、あるいは日が沈んでから仕留めた獲物を片手に帰ってきたという。今日、マンジョは、かつて毎日数十キロメートルを歩き、カワイノシシ（*gudino, Potamochoerus larvatus*）やレイヨウ（*dollo*）といった獲物を仕留めてくるアッド（*aaddoo*）[5]としてのマンジョについて、誇らしげに語る。

狩猟の方法は動物によって異なるが、カワイノシシ、レイヨウなどは落とし穴（*kotino*）や虎鋏み（*wosumato*）といった罠（*ollo*）を仕掛ける方法、縄（*woderoo*）を足にかける方法（*kambo*）、あるいは槍（*gino*）で仕留める方法等

がとられた。2～3匹の犬を使って動物を追い込む犬猟（*kunano na tokki yecchiki deebiye*）も行われた。コロブス（*ello, Colobus guereza*）は網（*dabbo*）によって捕獲された。また、ライオン（*dahero, Panthera leo*）やバッファロー（*gaho, Syncerus caffer*）などの大型獣は銃で狩られた。カファ地方北部を流れるゴジェブ川に棲むカバ（*gomaano, Hippopotamus amphibious*）やワニ（*aach-aayo, Crocodylus niloticus*）もまた食用として狩猟の対象とされた（Orent, 1969:47）。マンジョが食用のために狩猟する野生動物のなかには、コロブスやイノシシをはじめ、カファが不可食とする野生動物も含まれていた[6]。

狩猟の対象となる野生動物は食用の動物だけではない。例えば麝香をもたらすジャコウネコ（*wongo, Civettictis civetta*）を捕獲するのはマンジョの役割であった（Huntingford, 1955:110; 石原, 2005:194-195）。マンジョは捕獲したジャコウネコを飼育することはなく、ジャコウネコはカファの商人を通じてカファの手に売り渡され、飼育された。また、ヤマアラシ（*caayo, Hystrix cristata*）は万能薬として見なされており、マンジョはカファに依頼されてヤマアラシを捕獲することもあった[7]。狩猟された動物の皮は衣服や帽子として利用され、捕獲したコロブス、ヒョウ（*maho, Panthera pardus*）、ライオンなどの毛皮や、ゾウ（*dangiyo, Loxodonta africana*）の象牙は重要な現金収入源となった。また、カファの農耕地を荒らすカワイノシシ、サバンナモンキー（*shakko, Cercopithecus aethiops*）などの害獣を駆除・捕獲[8]することで、カファから報酬として農作物や動物の肉を得ていたともされる（Gezahegn, 2003:90）。

マンジョの男たちが狩猟のために出かけている間、女性たちは家で土器を作った。女性たちが製作する土器はコーヒーポットや、調理に使われる大小さまざまな土鍋、パンを焼くためなどに使用される皿、水瓶などがある。かつて、これらの土器は、市場に出荷したり、巡回販売したりされることで生計を支える現金収入となっていた。

現在、マンジョの生活は大きく変化し、狩猟はほとんど行われていない。その理由のひとつに狩猟に対する規制が厳しくなったことが挙げられている（Gezahegn, 2003:90）。確かにデルグ政権下で狩猟が禁止されたが、マンジョは犬を使った狩猟や、銃や網を用いた狩猟を続けていた[9]。むしろ、マンジョが狩

猟から離れていった原因のひとつには、野生動物が減少し、バッファロー、ゾウをはじめとした大型動物はかなりの遠方へ行かないと捕れなくなってきたことが挙げられる[10]。また、もうひとつの理由にマンジョの食生活の変化が挙げられる。デルグ政権が崩壊した後、メカーナ・イエススをはじめとする福音派キリスト教会がカファ地方での布教を開始したことによって、マンジョは福音派キリスト教へ改宗していった（吉田, 2007)。福音派キリスト教会は、マンジョに対してサバンナモンキー、ヒヒ（*sheexo, Papio anubis*)、コロブスなどを食べることをやめるように、と聖書の言葉を引用しながら教えたという。そのため、今日、マンジョが食べる肉は市場が開かれる日に購入したウシの肉や、自らが飼育するニワトリやヒツジ、ヤギなどの肉である。現在も、一部のマンジョは釣竿や仕掛けを用いて川で魚釣りを行っているが、大半のマンジョは野生動物を食すことをやめ、狩猟から農業を主とした生業形態へと移行している。

今日、マンジョは主食となるエンセーテ（*ensete*)[11] をはじめ、トウモロコシ、ソルガム、テフ、オオムギ、コムギ、豆類などを栽培している。また、タマネギ、ニンニク、ショウガ、キャベツ、ジャガイモ、サツマイモ、タロイモといった、日常的に利用する作物が家の裏庭に植えられていることも多い。バナナ、マンゴー、パパイヤといった果樹も植えられている。これらの農作物や果実はマンジョの食卓に登場するだけでなく、商人に売り渡されることや、定期市で販売されることによって現金収入にもなっている。また、コーヒー栽培をはじめとする換金作物の栽培によって多くの現金収入を獲得しているマンジョもいる。

生業の変化に伴い、マンジョの現金獲得手段も大きく変化している。上述のような換金作物の販売のほかに、マンジョの大半はブルズ（*brəz*)、タッジ（*t'ajj*)[12] の原料として需要が高い蜂蜜の養蜂を行っている。カファは養蜂についての技術や知識が乏しいために、マンジョから蜂蜜を購入している。また、カファ地方の行政都市ボンガ周辺に生活するマンジョは、農業を行う傍らで薪や木材を販売して現金収入を得ている。薪を背負って売り歩くマンジョの多くは女性であり、そのような姿はカファ地方各地で見かけることができる。マンジョの女性の多くは土器製作をやめ、自宅で使用するためだけに土器を製作する女性もいる。世代が若くなるにつれ、土器製作の技術を身につけない女性も増えてきてい

る。これは、同じく土器を作るマンノ[13]の女性にも見られるが、アルミニウム製の鍋やポリタンクの普及によって土器の需要が減少していることや、土器を作ることがカファから差別される要因のひとつであると女性たちが考えていることが挙げられる。

現在、かつて狩猟集団とされたマンジョは狩猟をやめ、主として農業を行い、カファと同様の生活を営んでいる。中には、換金作物の栽培などによってカファ以上の経済力を持つマンジョも登場している。彼らは、ウシ、ヒツジ、ヤギ、ニワトリを飼育するだけでなく、ウマを所有し、金の指輪、ピアスといった装飾品を身につけ、トタン屋根の家[14]に住んでいる。このようなマンジョの姿からは、かつて狩猟集団であったアッドとしての面影が薄れつつあるということができる。

3．カファが語る「マンジョ」

現在、マンジョは狩猟をやめ、カファとほぼ同じ生活を送っている。だが、マンジョはカファから日常生活において忌避され、差別されている。カファ王国は、1897年にエチオピア帝国に編入されたことで、その政治構造が崩壊し、王は廃位された。だが、その後もカファ王国の階層的社会秩序は踏襲され、マンジョとカファの社会関係および振る舞い形式の多くはそのまま維持された。1974年にエチオピアの政権が社会主義を標榜するデルグ政権に移行したことでカファ社会の階層的社会秩序は制度的に消滅し、マンジョはカファと制度的に平等になった。また、現政権下ではカファによるマンジョへの差別は人道問題とみなされ、マンジョに対しては政府によるアファーマティブ・アクションやNGOによる活動など、さまざまな取り組みがなされている。だが、現在もマンジョはカファから「真の人」として見なされず、デルグ政権以前と同様に日常生活のさまざまな場面において忌避され、不平等を強いられている。

マンジョは自分たちとは「異なる人」[15]とカファは説明する。カファはその根拠としてマンジョの食習慣や身体的特徴、性向などに言及してきた。

①食習慣　：マンジョがサバンナモンキー、ヒヒ、コロブス、イノシシ、病気・事故などで死んだ動物等の、カファにとって不可食のもの

を食べる。また、マンジョが口にするものはカファの可食・不可食にかかわらず汚い。とりわけ、水曜日と金曜日をはじめとした断食を行うエチオピア正教会系キリスト教徒であるカファの一部は、マンジョが断食を行わないことにも言及する[16]。

②身体的特徴：マンジョはカファと比較すると毛髪が固く、縮れが強い、また、マンジョは鼻が低く、小柄な人が多い。身体的特徴のみならず、保健衛生面においても、マンジョの多くは、身体や衣類を洗わず、不快な臭いを発し、皮膚病を患っているなど、不衛生である。

③性向　　：マンジョは嘘つきで、邪悪な心を持つ。教育に関心がなく、世間知らずであるため、貯蓄を知らない浪費家で、カファのものを盗む泥棒である。モラルの低い、悪い人々である。

マンジョに対する否定的イメージは、カファだけではなく、カファ地方で暮らすアムハラ（Amhara）の人々や、他地域からやってきてカファと結婚した人々の間にも共有されている。このことに対して、マンジョは彼らがカファの習慣に慣れてしまったからであると説明する。

カファはマンジョについてさまざまに語るが、そこで語られるマンジョの姿は必ずしも実際のマンジョの姿とは一致していない。このような中、マンジョはカファがマンジョについてどのように語っているのかを耳にしており、それはマンジョのカファに対するイメージ形成に大きな影響を与えている。マンジョの１人は、カファがマンジョのことを「指の爪が２つに分かれていて、男は後頭部から尻尾が生えており、女は額から尻尾が生えている」と話しているのだと語り、これに対して、「カファは今も昔も嘘つきで、人を騙そうとする」のだと語った[17]。そして、自らは勇敢であるというマンジョは、カファは臆病で猜疑心が強い心の醜い人々であるという。

筆者は、実際にカファとマンジョの家に滞在し、彼らの家で何度も寝食を共にしたが、カファの生活環境とマンジョの生活環境の間に大きな相違点を見出すことはできず、むしろ、類似点の方が多いように思われた。だが、カファはあくま

でもマンジョを自らとは「異なる人」とみなし、差別している。

4．カファによるマンジョへの差別

デルグ政権期以前は、マンジョがカファと同じ道を通ろうとするとマンジョは殴られたり、棒で打たれたりされて道を通ることができなかった、と当時を知るマンジョは回想する。そして、マンジョはカファに対して「*Showocchi qebona*（貴方様のために大地に伏せます）」といって、両手を挙げて挨拶しなければならなかったという。また、マンジョがカファと同じ靴や服を着ていたら、そのことを理由に暴力を受け、衣服を剥奪されたという。市場においても、カファはマンジョに対しては高額で品物を販売し、カファがマンジョから品物の買い取りを行う際にはカファの半額の値段買い取りを行っていたという。他にもカファはマンジョの家畜を徴発することもあったという。

今日では上述のような関係は見られなくなっているものの、カファとマンジョの日常生活のさまざまな場面に差別は潜んでいる。本章では、マンジョとカファの関係を、具体的に見ていく。今日、マンジョとカファが互いにどのようなイメージを抱き、どのような社会関係を築き上げ、日常生活を営んでいるのかについて、筆者の観察や経験と、マンジョおよびカファの人々からの聞き取りに基づいて記述していく。

《事例１　家への立ち入り》

カファの大半はマンジョにカファの家への立ち入りを拒絶している。マンジョはカファの家の中には入れず、家の外で養蜂に用いる蜂の巣箱やエンセーテの葉の上に座ることを求められる。もし家の中へ入ることが許されたとしても、マンジョが腰掛ける場所は決められており、そこは入口付近である。カファの中には、「もしマンジョが家に入ってきたら、違う場所へ引っ越す」[18] と語る人々もいる。

マンジョがカファの家に立ち入ることを禁じるのは、個人のカファの家だけではない。ブルズ、タッジ、アラキ[19] といった飲み物や、パンやインジェラ[20] などの食べ物を出す飲食店においても共通している。マンジョが店に立ち入って何か

を口にすることは拒否されることが多い。カファがマンジョを拒否する仕方は、多くの場合、商品が売切れてしまったと偽ることであり、あからさまに追い払うことは稀である。

また、マンジョとカファの座席を区別し、マンジョの座席を指定する店もある。マンジョの入店を認めない場合は店外にマンジョ専用の座席が設けられ、入店を許可する場合は店内の入口付近の一角にマンジョ専用の座席が設けられている。[21] このような店の中には、指定された座席ではなくカファの座席に座ったマンジョに対して、食べ物や飲料を提供しない店もある[22]。

《事例 2　共食》

カファにとって、マンジョと共に食事をすることや同じ食器を使って飲食をすることは禁忌とされている。これは、マンジョが日々使用している調理器具はカファが不可食とするものを調理しているものとしてみなされるためである。そのため、マンジョの調理した食物、マンジョが使用する調理器具及び食器は、カファにとって忌避の対象となっている。この関係をよく示しているのが蜂蜜とタッジの関係である。カファにとって、マンジョが採取した蜂蜜を食べることは禁忌ではないが、マンジョが加工したタッジを飲むことは禁忌となる。

マンジョに食べ物を提供するカファの店の中には、マンジョとカファの食器を区別し、マンジョ専用の食器に目印をつけている店も少なからず存在するという。[23] 目印の他にも、カファにはしっかりと洗われた食器で食べ物や飲料が提供されるのに対し、マンジョには何ヶ月も洗ってないような埃や土で汚れた状態の食器で提供する店もある。

《事例 3　帝政期における小学校》

デルグ政権以前、カファ地方の農村部には学校が少なく、学校教育を受けるのは限られたわずかな人たちだけであった。そのため、マンジョの子どもが学校教育を受けるようになったのは、カファ地方の農村部に初等学校が建設され始めたハイレ＝セラシエⅠ世による帝政期の末期からである。だが、マンジョの子どもはカファによって学校から追い出され、教育を受ける機会を逸してきた。カファ

はマンジョと一緒に同じ教室で学ぶことを拒否し、マンジョの学生を追い出したり、あるいはカファ自らが教室から出て行ったりしてきたのである。だが、多くの場合は、カファの子どもが「マンジョの子どもから暴力を受けた」と親に偽ることによって、マンジョの生徒はカファの親によって学校から追い出されてきた。マンジョのA氏は、帝政期末期に学校に通ったが、「土地の主（*geppe-tato*）」[24]の子どもが親にA氏の悪口を言ったために、A氏はわずか12日間学校に通っただけで学校から追い出されたという[25]。

《事例4　現政権における小学校》

今日、カファやマンジョを問わず、多くの子どもたちが学校へ通っている。だが、学校に通わないマンジョの子どもも多く、とりわけ、マンジョの女の子は学校に通わない傾向が強い。これは教育への関心とは別に、カファによる差別が少なからず関係しているようである。現在では、事例3のようにマンジョが教室から追い出されることはなくなったと聞くが、マンジョの子どもの中には学校に行くのが怖いと口にする子どもも存在する。登下校の際にカファに石を投げられたり、殴られたりするのだと語る。

例えば、2005年には、カファ地方北部のゲシャ行政地区アマロ・アッタ行政村にある小学校で、授業の合間の休憩時間に5年生のカファの少年が教室で談笑していた1年生のマンジョの生徒に窓の外から石をぶつけようとして投げたところ、石が隣に座っていたマンノの生徒の額に当たったという事件がおきている。このカファの少年は、すぐさま学校周辺の家の敷地へと逃げ込んだが、教師たちによって捕えられた。石をぶつけられたマンノの生徒は流血し、病院へと運ばれた。この事件を耳にしたマンノの親たちは、総出で学校に押し寄せ、事件を起こしたカファの少年の親も呼び出されて警察沙汰になった[26]。

さらに、マンジョの学生たちは同じクラスにカファの学生しかいない場合、ノートの閲覧や文房具の貸し借りを拒絶されることや、マンジョであることを理由に学生たちの輪に入れてもらえないことがあり、孤独を感じることも多々あるという。このような経験をすることによって、学校に入学しても早々に脱落してしまう子どもたちも少なくない。

《事例５　マンジョの教師》

マンジョの教員が赴任した村では、学校でマンジョの教員がカファの生徒に教えるということに不満を感じるカファもおり、マンジョの教員の家に石を投げつけるという事態がたびたび発生している。別の村では、村民が新任教員を迎えるために教員用の宿舎を建設したが、新任教員がマンジョであると知ると、村民がこの宿舎ではなく、その台所[27]に案内したという[28]。

《事例６　マンジョの警察官》

Ｂ氏は2003／2004年からゲシャ行政地区のダッカ町で警察官として勤務している。Ｂ氏の出身地はダッカから徒歩２時間の行政村であり、Ｂ氏にとってダッカは地元である。町の喫茶店や食堂は、警察官であるＢ氏の入店を拒否することはない。だが、当初、Ｂ氏が生活する家を貸してくれる人は誰もおらず、Ｂ氏はダッカで住む家を見つけるまでにも苦労をしたという。カファはＢ氏がダッカに住むことに反対し、困苦したＢ氏は裁判所に訴え、居住を許可する書類を勝ち取った。今日、Ｂ氏が生活する家は政府によって提供されたものであり、ダッカの街中に住むマンジョはB氏だけである。

Ｂ氏はダッカで居住する家を得たが、それが満足できる生活に繋がったわけではなかった。Ｂ氏の同僚である警察官は20人以上いるが、親しくしているのはセム系のグラゲとオモ系のウォライタ出身の２人であり、カファではない。また、Ｂ氏には近所付き合いも極めて少ない。筆者がB氏の家に約1ヶ月間滞在した期間中に、B氏が隣人であるカファのコーヒー・セレモニーに呼ばれたり、隣人を呼んだりするということは1度もなかった。Ｂ氏の隣人のカファはコーヒー・セレモニーの際に、筆者を招待し、迎えにやって来たが、そのとき筆者と一緒にいたＢ氏に声をかけることはなかった。

Ｂ氏の妻Ｃもまた、髪の毛を結ってくれる人物がいないことに困るとこぼしていた。通常、女性たちは約１週間間隔で髪の毛を結いなおす。自分の手で髪の毛を編みこむことは難しく、同居する女性たちと結いあったり、近隣の女性に頼んで髪の毛を結ってもらったりすることが一般的であるが、Ｃがマンジョであるため、カファの女性たちはＣの髪の毛を結いたがらないのである。

《事例７　幼少期のカファとマンジョ》

デルグ政権期に幼少時代を過ごしたマンジョの青年Ｄは、その居住地区にマンジョの世帯が少なく、近隣にカファが居住していたため、幼少期はカファの子どもと一緒に遊んだという。当時は、カファの家に入り、共に食べ物を食べ、コーヒーを飲むこともあったという。だが、８歳を過ぎるころからＤはカファの家へ入ることを拒否されるようになると同時に、座る場所が入口付近に制限され、木の切り株や蜂蜜の巣箱の上に座るよう求められるようになった。カファの子どもたちは、親がいないときに内緒でＤを家に入れてくれることもあったという。また、カファの子どもがＤの家にやって来て、コーヒーを飲んだり、何かを食べたりすることもあったという[29]。あるとき、Ｄがカファの家に入れてもらえなくなったことを疑問に思い、自分の父親に質問したところ、父親の回答は「昔からの文化だ」というものであったという。Ｄは父親の答えに満足できず、その後、自らを差別するカファとぶつかり合い、幾度か喧嘩もしたというが、今では彼らと友人関係を築き上げるようになっている[30]。

《事例８　カファとマンジョの結婚》

結婚は男女個人の間のみで完結するものではなく、親族の同意を必要とするものである。マンジョの中には、カファとの結婚を望む者も少なくないが、カファの中からマンジョとの結婚を望む声は聞こえてこなかった。20代半ばのマンジョの青年Eは、「カファの女の子はマンジョの女の子よりも、外見がかわいくて綺麗な子が多い。カファの女の子と結婚したいと思うこともある。それなのに、カファはマンジョとの結婚を拒絶する。結婚は個人の男女の間で行われるものなのに、個人名でEとFの結婚とはいわずに、『カファ』と『マンジョ』の結婚という。納得いかないよ」と語った[31]。だが、カファの中からマンジョとの結婚を望む声は聞こえてこなかった。カファ地方で生活するアムハラの女性は、「マンジョと結婚するなんて、絶対にないわ。考えただけでもぞっとする！」と語りながら、地面に唾を３度吐き捨てた[32]。

カファの多くは、自らがマンジョと結婚しないだけでなく、自分の子どももマンジョと結婚させることはないという。それは、親族に反対されるという理由だ

けでなく、マンジョと結婚させることによって世間から後ろ指を指されるからであるという。したがって、マンジョとカファの男女の間で結婚することが合意されることも、実際に結婚に至ることもほとんどないようである[33]。

以上、8つの事例をみてきた。これらの事例からは、今日、カファとマンジョの関係に対するさまざまな取り組みが行われていても、尚もカファとマンジョの関係には差別が存在しているという状況を読み取ることができる。優先的な教育機会や就職機会を与えられ、学校教育を終えたマンジョの中には教員、農業普及員、警察官といった職に就くマンジョも登場している。だが、マンジョは行政役場や行政村における村長などの役職には就けていない。さらには、そのような社会的地位を獲得したマンジョに対しても、カファによる差別は例外なく行なわれていることが明らかになった。

とはいえ、マンジョとカファの関係が常に差別の様相を帯びているわけではない。8歳頃までの子どものカファとマンジョの関係において、差別はさほど影を落としてはいない。だが、そこにマンジョを差別する成人のカファが介入することによって、差別が意識化されていくといえる。日常生活の中で差別が繰り返し行われ、子どもたちがそれを目の当たりにすることは、子どもたちがマンジョとカファの差別に意識的になり、差別に馴化し、それをあたりまえのこととして身につける過程であるといえる。

中には、このような状況を乗り越えた青年Dのようにカファとマンジョが個人的に良好な関係を築いている場合もある。そこでは、互いの家を出入りし、共食を実践されるなど差別は問題化していないように見えるが、このような個人的な付き合いも、必ずしも公に行われているわけではない。マンジョと個人的な付き合いを行うカファの中には、マンジョを家に入れたり共に食事をしていたりしていることが周囲のカファに知られないように警戒し、秘密にしている人物もいる。例えば、マンジョがカファの家を出入りする際には、周囲にそれを見ているカファがいないかどうかを確認する場合や、そこにカファがいる際にはマンジョを家に入れないという場合もある。他にも、あのカファがマンジョの家に入ったという噂が村のカファの間で囁かれるなど、カファ同士でお互いの行動を牽制しあう雰

囲気すら漂っている。

日常生活におけるマンジョとカファの個人的な関係は柔軟性を備えながらも、カファの個人が集団としての「カファ」を背負ったとき、そこにはマンジョへの差別が立ち現れる。カファにとって、マンジョと親しくすることは、同胞であるカファから後ろ指を指されることであり、疎外される危険性を兼ね備えている。このことは、カファという集団の一体感を保つことにつながっているともいえる。つまり、カファはマンジョを差別することによってカファの公共性にアクセスしているのである。

おわりに

今日、実のところ、マンジョとカファの生活に大きな相違点はないといえる。歴史的な過程を経る中で、かつて狩猟集団とされていたマンジョの生活は大きく変化し、マンジョは社会的にも経済的にもカファと対等になりつつある。また、それまで在来のエコー信仰を実践し宗教を持たないとされてきたマンジョは福音派キリスト教徒やカトリック教徒になり、カファと同じように教会で礼拝を行うようになっている。そこでは、マンジョは生業にはじまり、宗教を持つことでかつての生活習慣や慣習は姿を変えている。

だが、カファはあくまでもマンジョに否定的イメージを付与し、「異なる人」とみなすことによって、マンジョへの差別を正当化し、差別を維持しているといえる。カファが語るマンジョとは、あくまでカファがマンジョを差別の対象としてステレオタイプ化したマンジョの姿であるに過ぎないといえる。食習慣、身体的特徴、性向などによる他民族や他集団のステレオタイプ化は、エチオピアの多くの民族に共通する考え方である。そのため、ステレオタイプ化されたマンジョのイメージはカファ地方で生活する他の民族集団にも共有されているのである。

マンジョは、カファとほぼ同じ生活を営んでいるにもかかわらずマンジョを差別するカファに対して苛立ちを募らせている。カファによってステレオタイプ化されたマンジョ像と実際のマンジョの間には、さまざまな齟齬や矛盾が生じ、それらは今や書き換えることも隠蔽することもできないほど顕在化してきている。

マンジョの中からは「マンジョの家を自由に出入りする犬は、カファの家も出入りしている。犬はカファの家に入れるのに、私たちマンジョはなぜカファの家に入ることができないのか」[34]、「カファは泥棒や犯罪者は家に入れるのに、なぜ何もしていないマンジョを家に入れないのか」[35] という声もある。このような日常生活における差別の積み重なりから生じたマンジョの苛立ちは、暴力を伴う事件をも引き起こしている[36]。

本稿では、カファとマンジョの関係を通して、日常生活におけるさまざまな差別を具体的に見てきた。だが、なぜ差別がなされ、差別が問題とみなされるのかについては、より議論を深めていく必要があるだろう。

＜謝辞＞

本稿は、2006年度に南山大学人間文化研究化人類学専攻に提出した修士論文の第2章と第3章を中心に、加筆修正したものである。論文執筆にあたっては、南山大学の坂井信三先生、石原美奈子先生、名古屋大学の佐々木重洋先生をはじめ、多くの先生方からご指導を賜ってきた。また、京都大学の福井勝義先生には、本稿をまとめなおす上で貴重なご示唆を頂いた。フィールドの方々をはじめ、これまでの研究活動を支えてくださった全ての方々に心より感謝申し上げます。

注

(1) 調査は2005年1月～3月、同年8月～2006年2月および2006年8月半ば～10月半ばに実施された。第2次調査および第3次調査は、次の科学研究費補助金によって可能となった。平成17年度科学研究費補助金（基盤研究（A））、課題番号:17251014、研究課題:国民国家の形成過程における民族紛争の史的検証－北東アフリカ諸社会の比較研究－、研究代表者:京都大学大学院人間環境学研究科教授:福井勝義。

(2) 男子の捕虜が去勢され、宦官として用いられていた。

(3) カファ王国の王位はマンジョからカファのマット（Matto）クランへ、さらにミンジョクランへと移ったとされている（Lange, 1982:184-188)。王位の移譲に関する経緯は次のような口頭伝承によって語り継がれている。「マンジョとマットはシャッダ（Shadda）に近い大地の洞穴からやってきた。彼らは共に裸で大地から現れた。彼らは金も何も持っていなかった。マットはエンセーテとイモを持ち、それらは空の神（sky-god）から穴から出てくるときに持たされた。雄の子ウシと雌のウシもまた、マットと共に穴から出てきた。それらは洞穴から出てきたもの全てである。彼らが洞穴から出てきたとき、彼ら

は皮なめし、土器つくりを見つけた。マンジョが先に出てきて、マットが次に出てきた。地上の人びとははじめにマンジョを王とし、そしてマットを王とした。しかし、マンジョのふるまいは地上の人を悩ませるようになりはじめた。それは彼らが何でも食べたからである。彼らはコロブスの肉でさえも食べた。人々はマンジョを嫌うようになった。マンジョは嫌われているのを知り、マットに王の地位を受け渡した。マットは王について何も尋ねなかった。マットは（王位を）マンジョから与えられたのである。マットとマンジョは二度と争うことなく、地上の人びとは、それを彼らが兄弟であるからだと考えた。」(Lange, 1982:181)(括弧内筆者)。

(4) 2006年11月29日採集、マンジョ、女性、カファ地方ゲシャ行政地区。

(5) アッドとはカファ語で狩猟をする人の意味であり、現在では、マンジョが自らに誇りを持って語る際に用いられる言葉である。

(6) カファの幾人かは、カファがこのような肉を不可食とする理由のひとつとして、カファは上顎に歯が生えている動物を食べず、これらの動物には上顎に歯があることを指摘している。

(7) ヤマアラシの肉は、風邪の諸症状のほかにも、カファ語でカリチョ（*qalicho*）、シッキヨ（*shikkiyo*）と呼ばれる皮膚病に有効であるとされている。

(8) 捕獲したサバンナモンキーやヒヒを農耕地のわきに造られた木製の檻にいれ、他の動物の見せしめとすることで、他の動物はこれを恐れてやってこなくなる。

(9) マンジョのような周辺民に対し、国家の規制はあまり影響を及ぼさなかった。同様な状況がエチオピア西南部の少数民族で、伝統的に狩猟を行ってきたマジャンギル、バンナでもみられる（佐藤, 2005; 増田, 2005)。

(10) カファ地方ビタ行政地区ウォシェロ行政村のマンジョの人々の記憶では、最後にバッファローが狩られたのは1989年であり、それはシェカ地方マシャ近辺まで狩猟に赴いたときの出来事であった。

(11) バショウ科の多年生作物である。そのデンプンを採取、加工、発酵させたものがカファ地方の主食コチョ（*qoco*）である。

(12) ブルズとは蜂蜜を水で溶かした飲料であり、タッジ（蜂蜜酒）は蜂蜜と水に、発酵を促すためにゲショ（*Rhamnus prinoides*）という木の葉を加えた飲料である。

(13) マンノとは、皮なめしの人々のことを指し、マンジョと同様にカファから差別されている。また、マンジョとマンノの間にも忌避関係が存在する。

(14) 現代のエチオピアの農村部では、トタン屋根の家は富の象徴として見なされている。

(15) これは、単に我々とは「異なる」とか、「同じではない」というように表現される。

(16) エチオピア正教会系キリスト教では毎週水曜、金曜が断食の日とされ、肉、卵、乳、バターといった動物性蛋白質を含む食品の断食を行う。また、イノシシ、ウマ等の肉を食すことは禁忌とされている。

(17) 2006年1月19日採集、マンジョ、男性、カファ地方ゲシャ行政地区。

(18) 2005年1月19日採集、カファ、男性、カファ地方ビタ行政地区。

(19) アラキとは、トウモロコシ、フィンガー・ミレット、ゲショなどを水と混ぜ、発酵させたものを蒸留してつくる酒のこと。

(20) インジェラとはエチオピアの主食で、粉状にしたテフ（トウモロコシやソルガムの場合もある）に水を混ぜて発酵させてクレープ状に焼いたもの。

(21) 筆者はマンジョの座席が店内の一角に指定されている店を目にしたが、店外に用意されている店は目にしておらず、今日はそのような店はわずかであると聞いた。

(22) カファからこのような扱いを受けたマンジョが、警察に通報し、カファを裁判所に訴えることも珍しくない。

(23) デルグ政権期まで、マンジョがカファから食物や飲み物を振る舞われる際は、エンセーテの葉やイモの葉が皿やコップとして用いられていた。

(24) 「土地の主」とは、カファ社会の階層的社会秩序の中で農耕民の上位に位置し、デルグ政権期以前まで土地を所有し、その土地を所有地内に居住する人々に貸していた人物である。「土地の主」は、毎年、テフやトウモロコシなどの農作物を収穫した後に、それぞれが収穫できたことを土地に宿る精霊コッロ（*qollo*）に感謝する儀礼であるデッジョ（*Dejjo*）を執り行ってきた。

(25) 2006年9月5日採集、マンジョ、男性、カファ地方ゲシャ行政地区。

(26) 2005年12月22日採集、カファ、男性、カファ地方ゲシャ行政地区。

(27) カファ地方では、台所は母屋と別棟になっている場合が多く、一般的に、台所の造りは母屋に比べて粗雑である。

(28) 2006年10月5日採集、マンジョ、男性、カファ地方ギンボ行政地区。

(29) カファの子どもは、レイヨウの肉があると食べたが、カワイノシシの肉は食べなかったという。

(30) 2006年9月16日採集、マンジョ、男性、カファ地方ゲシャ行政地区。

(31) 2005年12月29日採集、マンジョ、男性、カファ地方ゲシャ行政地区。

(32) 2005年9月採集、アムハラ、女性、カファ地方ビタ行政地区。

(33) マンジョとマジャンギル、オロモの間で結婚する例はわずかではあるが確認されている。また、デルグ政権期に、自らの出身地から離れたマンジョの女性が、カファの男性と結婚したが、ふとしたことをきっかけにマンジョであることが男性に知られ、離婚したという事例もあるという。

(34) 2005年3月採集、マンジョ、男性、カファ地方ビタ行政地区。

(35) 2006年10月採集、マンジョ、男性、カファ地方ゲシャ行政地区。

(36) 2002年3月には、カファ地方とシェカ地方の隣接地区においてマンジョが同じ行政村内に暮らす隣人のカファを襲撃し、死者が出た事件が発生している。

文献

Beckingham, C. F. & Huntingford, G. W. B. (eds.)

1954 *Some Records of Ethiopia 1593-1646: Being Extracts from the History of High Ethiopia or Abassia by Manoel de Almeida together with Bahrey's History of the Galla.* London: The Hakluyt Society.

Bieber, F. J.

1920 *Kaffa: Ein altkusschitisches Volkstum in Inner-Afrika.* 2 v, Münster.

Fleming, H.

1976 Kefa (Gonga) Languages. In M. L. Bender (ed.). *The Non-Semitic languages of Ethiopia.* pp.351-376. East Lansing, Michigan state University, Monograph no.5.

Gezahegn Petros

2003 Kafa. In D.Freeman & A.Pankhurst (eds.). *Peripheral People: The Excluded Minorities of Ethiopia.* pp.80-96. Asmara: The Red Sea Press.

Grühl, M.

1932 *The citadel of Ethiopia The empire of the divine emperor.* London.

Huntingford, G. W. B.

1955 *The Galla of Ethiopia the Kingdom of Kafa and Janjero,* Ethnographic Survey of Africa. International African Institute, London.

Lange, W. J.

1982 *History of the Southern Gonga (Southern Ethiopia).* Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.

増田研

2005 「『野生の宝庫』の行く末」『社会化される生態資源　エチオピア絶え間なき再生』、福井勝義（編）、pp.151-178、京都:京都大学学術出版会。

Orent, A.

1969 *Lineage structure and the supernatural: the Kafa of Southern Ethiopia.* Ph.D.Thesis. Boston University.

1970 Refocusing on the history of Kafa prior to 1897: a discussion of political process. *African Historical Studies* 3 (2):263-293.

佐藤廉也

2005 「森棲みの戦術　—20世紀マジャンの歴史にみる変化と持続—」『社会化される生態資源　エチオピア絶え間なき再生』、福井勝義（編）、pp.257-292、京都:京都大学学術出版会。

吉田早悠里

2007 「『マンジョ』の生業変容とキリスト教への改宗 ― エチオピア南西部カファ地方の事例から ―」『南山大学人類学博物館紀要』25:98-100。

（よしだ　さゆり／比較人文学）